

フランス語における *Faire*-不定詞 使役構文と OCACCS 仮説

田 中 裕 幸

I 序

様々な言語において、定形節では主格で標示される要素が、不定詞補文内では与格で表れることがある。例えば日本語の能動態定形節では他動詞の動作主は主格（「が」）で標示されるが、間接受動態に埋め込まれると同じ要素が与格（「に」）で標示される（1b）。同様にフランス語の他動詞は定形節では主格主語を取るが（2a）、動詞 *faire* ‘make’ を用いた使役構文に埋め込まれると、この主語（被使役者）は *à* ‘to’ を伴って表れる（2b）¹⁾。この *à* が前置詞であるのか与格のマーカであるのかは議論の分かれるところであるが、ここでは後者であるという立場を取る（II 節参照）。対照的に、英語では被使役者は対格で標示される（3b）。

- (1) a. 子供がリンゴを食べた。
b. 太郎は子供にリンゴを食べられた。

1) 本稿で引用したフランス語の例文は原典において英語のグロス・翻訳が付されており、基本的に原典のまま英語のグロス・翻訳を付した。必要に応じて一部改訂し、原典においてグロスが提供されていないものについては著者が作成した。本稿で使用した省略形は次の通りである。NOM: 主格 (nominative)、DAT: 与格 (dative)、ACC: 対格 (accusative)、SG: 単数 (singular)。

- (2) a. Son fils a mangé la pomme.
His/her son has eaten the apple
'His/her son has eaten the apple.'
- b. Jean a fait manger la pomme à son fils.
J. has made eat the apple to his son
'Jean had his son eat the apple.'
- (3) a. She ate an apple.
b. John made her eat an apple.

本稿では(2b)に例示されるフランス語使役構文の分析を提示する。一般的な前提とは異なり、使役動詞 *faire* (および同じパターンを取る場合の他の使役動詞・知覚動詞)は格付与能力を持たないと仮定する²⁾。この語彙的な性質についての前提と、著者が Tanaka (2011)、田中 (2012, 2014) において発展させてきた一般的な格付与のメカニズムおよび動詞句の構造についての仮説から、与格の表出が自然に導かれることを示す。

Ⅱ節でこの使役構文の統語的性質を示し、Ⅲ節で分析の理論的な準備を行った後、Ⅳ節で分析を提示する。Ⅴ節ではこの分析をまとめ、さらに英語との差異に対して本論が持つ理論的示唆について考察する。

Ⅱ *Faire*-不定詞使役構文

使役動詞 *faire* 'make' に代表される不定詞補文構造においては、(2b)、(4a) のように不定詞で表れる動詞が他動詞である場合、被使役者(不定詞の主語)が *à* を伴う与格、不定詞の目的語が対格で表れ、語順は「*faire*-不定詞-不定詞の目的語-*à* 被使役者」となる。不定詞が自動詞の場合((4b)、(4c))は不定詞の直後に対格の被使役者が置かれる。

2) 格付与能力を持たないという点において、日本語間接受動文(1b)の形態素 *-rare* も同様の性質を持つと考えることができるが、分析の詳細は別稿に譲る。

- (4) a. Il fera boire un peu de vin à son enfant. (他動詞)
 he will.make drink a little wine to his child
 ‘He’ll have his child drink a little wine.’
 (Kayne 1975, p. 203 (6a))
- b. Il a fait partir son amie. (非能格自動詞)
 he has made leave his friend
 ‘He made his friend leave.’ (Kayne 1975, p. 203 (5a))
- c. Jean a fait tomber la chaise. (非対格自動詞)
 J. has made fall the chair
 ‘Jean made the chair fall.’ (Kayne 1975, p. 244 (129b))

このパターンを取る動詞は *faire* 以外に *laisser* ‘let’, *entendre* ‘hear’, *voir* ‘see’ などの使役動詞・知覚動詞がある。このように *faire* の後に不定詞 (infinitive) が現れ、不定詞主語がそれに続く構文を、Kayne (1975) に倣い FI (*Faire*-Infinitive) と呼ぶことにする。本稿における FI についての記述は *faire* 以外のこれらの動詞にも当てはまるが、*faire* を代表させて用いることにする³⁾。FI については数多くの研究がなされているが、不定動詞の自他によって被使役者の格が変わるという点は、どのような理論においても捉えられるべき基本的事実である。

(4) のような FI の基本的な例では *faire* と不定詞が隣接していることから、FI の分析には、*faire*-不定詞のシーケンスを (少なくとも表層のレベルにおいて) 複合化した一つの他動詞 ([v *faire* V(inf)]) として扱うものが見受けられる。そのような分析においては、*faire* は対格付与能力を持ち、自動詞

3) ここに挙げた *faire* 以外の動詞は、FI の他に「V-対格被使役者-不定詞 (-対格不定詞目的語)」の語順を取ることができる。Kayne (1975) では、このパターンにおいて生起する動詞は、概略、コントロール構造を取っているという分析がなされている。FI を取る動詞は対格付与能力を持たないというのが本論の主張であるが、このパターンでは対格付与能力を持つ目的語コントロール動詞であると見做す分析が考えられる。また、不定詞が他動詞である FI における *à* の代わりに *par* ‘by’ が生起するパターンもあるが、これも FI とは異なる性質を持っており、本稿の分析の対象外である。

と複合化した場合は複合的他動詞が被使役者に対格を付与する。他動詞と複合化した場合は、*faire* と不定詞がそれぞれ格付与能力を持つにも関わらず、*faire*-不定詞が全体として一つの対格を不定詞の目的語に対して与え、残る一つの項（被使役者）は二重目的語構文と同様、構造格を必要としない *à* 前置詞句として現れる。つまり二つあるはずの格が一つ「吸収」され、その結果（英語の使役構文（3b）のように）二重に対格が現れるということが許されなくなるという説明がなされる。その結果として、FI は表層の構成素構造および構造格の付与に関して（5）のような二重目的語構文と平行的であることになる。

(5) Marie a donné ce livre à Paul.

M. has given this book to P.

'Marie gave this book to Paul.' (Jones 1996, p. 105 (22a))

しかし、この分析は以下に述べる二つの理由で受け入れることができない。一つは、そもそも *faire* と不定詞は表層のレベルにおいてさえ複合化していないと考えられるという点である。確かに（4）では *faire* と不定詞は隣接しているが、Kayne (1975, §3.3) で報告されているように、実際には否定辞の *pas* や左方移動された *tout* 'everything' を介在させたり、*faire* を除いて不定詞のみ、あるいは不定詞とその補部を合わせたシーケンスを等位接続したりすることが可能である。

この問題に付随して、*faire* と不定詞が複合化していないならば、なぜ格吸収が起こるのかという問題も生じる。通言語的に、ある主要部が別の主要部に編入することにより、それが持っていた格に関する性質が変化し得ることが知られており (Baker 1988)、この場合も複合化が起こっているならば格吸収が起こったとしても不思議ではないが、上述のように複合化していないことを示す積極的な証拠がある中で格吸収が起こることを説明するのは難しい。

もう一点は受動化に関する事実である。一般的に (6) のような受動文においては、受動形態素によって動詞の対格付与能力が吸収されるため、対応する能動文 (ここでは (5)) において動詞から対格を付与される目的語が、時制辞 T から主格を与えられて格に関する認可条件を満たすとされている。仮に FI において *faire* と不定詞が一つの複合動詞として対格付与を行っているのなら、FI における対格要素を受動化することができるはずであるが、実際には不可能である (7b, d)。(この点において、*to* を付加すれば被使役者を受動化することができる英語使役構文 (8) と対照を成す。)

(6) Ce livre a été donné à Paul (par Marie).

This book has been given to P. by M.

'This book was given to Paul.' (Jones 1996, p. 104 (20a))

(7) a. Son fils a fait entrer Monsieur Dupont.

His son has made enter Mr. D.

'His son made Mr. Dupont enter.' (Kayne 1975, p. 244 (129a))

b. *Monsieur Dupont a été fait entrer par son fils.

Mr. D. has been made enter by his son

(Kayne 1975, p. 244 (130a))

c. Marie fera manger ce gâteau à Paul.

M. will.make eat this cake to P.

'Marie will make Paul eat this cake.' (Kayne 1975, p. 248 本文)

d. *Ce gâteau sera fait manger à Paul par Marie.

This cake will.be made eat to P. by M.

(Kayne 1975, p. 248 (139))

e. *Marie a été fait(e) manger un biscuit.

M. has been made eat a biscuit

(Rowlett 2007, p. 171, (78))

(8) John was made to {cry/eat spinach}.

また、(7e) のように FI において *à* の付いた被使役者を主語に昇格させる受動文も非文法的である。これは二重目的語構文の間接目的語 ((5) の *à Paul*) と同様、FI の *à* 句は常に PP であり、PP (の目的語) は主語に昇格できないからであると考えられるかもしれない。(フランス語では前置詞残留も許されないため、*à* を残したまま *Paul* を主語位置に移動することもできない。)

(9) *Paul a été donné ce livre (par Marie).

P. has been given this book by Marie (Jones 1996, p. 104 (20b))

しかし、二重目的語構文の *à* 句は常に目標 (Goal) という特定の θ 役割を持つのに対し、被使役者は特定の P と結び付けられる θ 役割を持っておらず、外項となり得るものであればどのような θ 役割を持っていてもよい。また、能動態定形節では PP ではなく主格の DP として現れる。従って *à* 使役者は θ 役割に結びついた PP ではなく、何らかの文法的要請により与格で標示された DP であると考えるのが妥当である。

以上の理由から、動詞複合化に頼らない FI の分析が必要であると考えられる。Kayne (1975) は、*faire* と不定詞が複合化していないために FI が受動化変形の構造記述に合致しないということから FI の受動化不可能性を導き出しているが、構造記述に頼ることができない現在の枠組みでは、受動化が阻まれる理由を動詞が複数存在すること自体に求めることはできない。近年では Folli and Harley (2007) に (主にイタリア語における類似の構文について) 動詞複合化を前提としない分析が見られるが、その分析においては、ある DP に与えられる格の値が他の DP に対して相対的に決定されるという依存格 (Dependent Case) 的なアプローチが採られている。次節以降ではそのような前提を必要としない分析を提示する。

III OCACCS と与格認可の理論

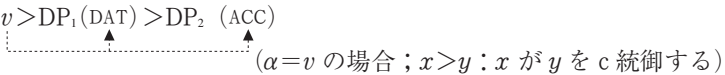
本節では Chomsky (2000) の枠組みに基づいて著者が提唱してきた与格認可と動詞句構造についての仮説 (Tanaka 2011, 田中 2012, 2014) を踏襲し、次節における FI 構文の分析の理論的な準備を行う。

まず与格の認可について以下のようなメカニズムを仮定する。各名詞句 (DP) は格を与えられなければならない (格フィルター (Chomsky 1981))。本稿では格付与とは、Chomsky (2000) で導入された操作 Agree に基づき、格付与子 (解釈不可能な ϕ 素性を持つ主要部) が、その c 統御領域内に存在する被格付与子 (DP) に格の値を与えることであるとする。(格付与子 T は主格を、*v* は対格を与える。) DP は常に解釈可能な ϕ 素性を持つが、言語によっては DP の解釈可能 ϕ 素性が不完全であることが許されると考える。ここで ϕ 素性が不完全であるとは、 ϕ 素性を構成する人称・数・性の素性のいずれかが統語的に不活性である状態を指す。また、与格とはこの状態で統語派生に投入された DP が持つ格の値であると仮定する。フランス語 (および日本語) は DP が不完全な ϕ 素性を持つことが可能である言語、つまり与格名詞句を持ち得る言語であると仮定する⁴⁾。

格付与子が完全な ϕ 素性を持つ DP を検出した場合は、それに格を与えて格付与子としての要求 (格付与子は格を与えなければならない; 逆格フィルター) が満たされるが、不完全な ϕ 素性を持つ DP、つまり与格名詞句を検出した場合、その DP の被格付与子としての要求は満たされるが、格付与子の方の要求は満たされず、さらに別の DP を求めて探査を続けると仮定する。つまり、与格名詞句は被格付与子として「不完全」であり、格付与子の要求

4) 本稿では立ち入らないが、フランス語・日本語と異なり、英語はこの意味で与格名詞句を持たない言語であると予想される (V 節参照)。英語には形態的与格は存在せず、二重目的語構文における二つの目的語も形態的に対格と見分けが付かない。フランス語では接語として現れる人称代名詞に対格と与格の形態的差異があり (例えば *le* (3.SG.ACC) に対して *lui* (3.SG.DAT))、代名詞ではない通常の DP でも二重目的語構文では *à* を用いて対格目的語と与格目的語を区別する (5)。日本語では格助詞「を」・「に」により対格と与格を区別する。

が満たされるためには与格でない別の DP が存在しなければならない。従って、格付与子 α の c 統御領域に二つの DP (DP_1 , DP_2) があり、 DP_1 が DP_2 を c 統御しており、かつ α 以外にこれらの DP に対する格付与子が存在しない場合、結果的に DP_1 は与格、 DP_2 は格付与子により定められる格 (格付与子が T であれば主格、 v であれば対格) で標示されることになる⁵⁾。

- (10) $v > DP_1(\text{DAT}) > DP_2(\text{ACC})$

 ($\alpha = v$ の場合 ; $x > y$: x が y を c 統御する)

ここで中心的な仮説 (11) を導入する。

- (11) OCACCS (The Object Case Assigner C-Commands the Subject)
 a. 動詞の項は全て VP 内に基底生成され、 v は項を取らない。
 b. v は EPP 素性を持つ。
- (12) a. [v_P 主語 v [VP V 目的語]]
 (Hale and Keyser 1993; Chomsky 1995)
 b. [v_P $\overbrace{v \{EPP\}}^{\uparrow}$ [VP_2 主語 V_2 [VP_1 V_1 目的語]]] (OCACCS)

(12a) は Hale and Keyser (1993) および Chomsky (1995) 以来、標準的に採用されている動詞句の基本構造であり、主語 (外項) が多重動詞句構造の上位の主要部 v に c 統御されない位置 (v_P 指定部) に基底生成されるが、OCACCS においては (12b) のように主語の基底生成位置が VP 内であり、 v が目的語のみならず主語をも c 統御する。Chomsky (1995) では v が外的 θ 役割を出し、対格も付与することで Burzio の一般化を捉えられるとしていたが、そもそも格付与が v の有無に連動しない可能性が指摘されており (Collins 1997; Řezáč, 2000)、対格付与子と外的 θ 役割を単一の主要部が担うことに必然性はない。さらに、(12a) では v が機能範疇の特徴とされる

5) ただし格付与子が日本語の T のように多重に格を付与する能力がある場合は、 DP_1 、 DP_2 ともその格付与子の定める格 (この場合は主格) を与えられる可能性がある。

格付与と語彙範疇の特徴とされる θ 標示の両方を担うことになり、その特殊性・二面性は望ましいものとは言えない。一方、OCACCS (12b) においては語彙範疇 V が θ 役割付与を、機能範疇 v が格付与を分担しており、この問題は解消される。

v の対格付与能力は他動詞の場合は義務的に、非能格自動詞の場合は随意的に持ち、非対格自動詞の場合は原則として対格を持たないと仮定する（但しIV節の分析を参照）。(12b) は他動詞句であるので v は対格付与能力を持ち、(11b) に従い EPP 素性を持つ。格と EPP の充足はどちらが先でもよいが、仮に EPP の充足が先に起こった場合、 v から見て最も近い位置にある主語が vP 指定部に引き上げられて EPP が満たされる。(最小性の原理により目的語は引き上げられない。) その後 Agree により v が目的語に対格を与える。(外項の痕跡は Agree の妨げにならないと仮定する。) ここで定形の T が vP を補部に取っていれば、その T が主語に主格を与える。このように、格付与より先に v の EPP 素性により主語が引き上げられれば、派生は収束し、能動態他動詞構文が得られる。

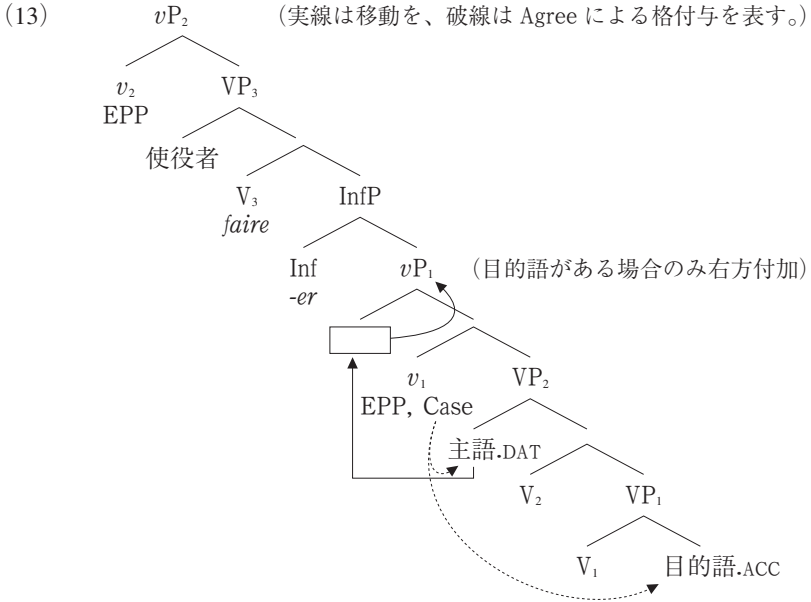
一方、EPP による引き上げより先に格付与が起こった場合、格付与の時点で v に対して主語と目的語の二つの DP がその探査領域に存在することになり、(10) のように主語に与格、目的語に対格が与えられるが、次の段階で EPP によって引き上げられた主語は既に格を与えられており、それ以上の格付与を受け付けない。従って直ぐ上に T がある場合、T の格が充足されず、派生は破綻する。結果的に定形の T が vP を補部に取る場合、対格付与よりも EPP の方が先に起こる派生しか収束しない。それならば、上位フェイズに格付与子が存在しない場合、 v の対格付与が v の EPP による引き上げよりも先に起こる派生が許されるはずである。次節ではそれが顕在化した例が⁶⁾ (2b), (4a) であると提案する⁶⁾。

6) 日本語の間接受動文 (1b) についても同様の分析が考えられるが、その提示は別稿に譲る。(概要は田中 (2014) を参照されたい。)

IV 分析

以下では、不定詞を埋め込む構文においては機能範疇 Inf(itive) が *vP* を選択すると仮定する。また、*faire* 等、FI を取る動詞は InfP を選択し、(13) のような階層構造を形成する。形態的には *vP* 内の動詞的主要部の複合体 ($v-V_1-...-V_n$) は動詞語幹に対応し、Inf はフランス語では不定詞に付加する接尾辞（典型的には *-er*）として形態的に具現化されると仮定する。*-er* は接辞であり、動詞的主要部の複合体が Inf に主要部移動することを要求する。(13) には明示していないが、移動の結果、動詞語幹に不定詞接辞が付加した形態、つまり不定詞が Inf⁰ の下に位置することになる。

次に、FI における *faire* 等の動詞は対格付与能力を持たないと仮定する。(V-DP-Inf を取る動詞は対格付与能力を持つと仮定できるが、ここでは扱わない。注3を参照。) これはⅡ節で述べた一般的な分析とは異なる仮定であり、本稿の分析において重要な役割を担う。FI における *faire* が格付与能力を持たないとすることは、*faire* の使役動詞以外の用法として *faire une fortune* ‘make a fortune’ のように目的語に対格を付与する他動詞として機能する場合もあれば、*Il fait beau*. ‘It makes good.’ (天気が良い) のように対格を出さない自動詞的用法もあり、特に不自然な仮定ではない。非対格性を判断する基準の一つである助動詞選択については、典型的な非対格動詞では複合過去を形成するための助動詞は *être* ‘be’ であるが、*faire* は *avoir* ‘have’ を取る。これについては *sembler* ‘seem’, *paraître* ‘appear’ など、非対格動詞であっても繰り上げ動詞であれば *avoir* を取るのと同様であり、節的な補部を取る非対格動詞は *avoir* を選択するという一般化が予想される。



以上の仮定に基づいて、FIの派生を詳しく見ていく。まず(4a)のように不定詞が他動詞である場合、(13)のように VP_2 内にDPが二つ現れ、それらに対して v_1 がⅢ節で見た通りに格付与を行う。この場合、EPPによる牽引が格付与よりも先に行われると主語が vP_1 指定部に引き上げられ、目的語に対格が付与されるが、次のフェイズ(vP_2)内に格付与子が存在せず、またPIC(Phase Impenetrability Condition (Chomsky 2000))により、それより外側のフェイズから格を与えられることもできないので、派生は破綻する。(faireが非対格であることに注意されたい。)逆に格付与がEPPによる牽引よりも先に起こった場合、(10)に従い主語に与格、目的語に対格が与えられる。与格の主語は(接語代名詞化しない場合) \hat{a} で標示される。その後 v_1 のEPPのために主語が vP_1 指定部に引き上げられる。フランス語のPFでの語順調整により、与格名詞句は目的語がある場合には vP_1 の右側に付加すると仮定する。faireの項である使役者は v_2 のEPPにより引き上げられ、

vP_2 を補部を取る定形の T により主格を付与される。従って EPP による牽引より先に主語、目的語双方に v_1 から格付与が行われる派生のみが収束し、結果として「主語.NOM-*faire*-不定詞-不定詞目的語.ACC-不定詞主語.DAT」という語順と格配列が生成される。

次に不定詞が自動詞である場合は、 v_1 の補部内に DP が一つだけ生成されることになる。非能格動詞は潜在的な他動詞であるという Hale and Keyser (1993) の提案に従い、 v が随意的に対格付与能力を持つと仮定すれば(Ⅲ節)、 v_1 により対格が唯一の項に与えられ、その他の点は他動詞の派生と同様に進む。(ただし、目的語が存在しないので、被使役者の vP_1 への右方付加は起こらない。)従って「主語.NOM-*faire*-不定詞-不定詞主語.ACC」という語順と格配列が生成される。

不定詞が非対格動詞である (4c) のような場合も非能格動詞と同様に派生が進むと考えるが、その場合に問題となるのが、非対格動詞の v も格を付与する可能性を認めなければならないという点である。非対格動詞は一般的に対格付与能力を持たないとされ、対格付与能力を持たずに派生に投入される場合があることを示す証拠はあるが、著者の知る限り、どのような場合でも対格付与能力を持たないことを積極的に示す証拠はない。ここでは、非対格動詞はデフォルトとして対格付与能力を持たないが、習得上、持つと判断できる肯定的証拠がある場合は随意的に持つことが許されると考える。フランス語では、虚辞 *il* が非対格動詞の唯一項と共起する (14) が許される。*il* は単独で格を受け取る位置に生起できるが、もし (14) においてデフォルトの通り非対格動詞が格を出さないのであれば、文中に存在する唯一の格付与子である T の格を *il* と *trois filles* で奪い合うことになる。従って、両者が格を得るには T だけでなく v も格を出すと考えざるを得ない⁷⁾。

7) Belletti (1988) は非対格動詞が内在格としての部分格を出すことにより補部の名詞句の格を認可すると主張するが、ここでは部分格の付与があったとしてもそれだけでは不十分であり、構造格による認可が必要であると考え。確かに (14) の動詞の後に現れる名詞句は不定 (indefinite) でなければならないが、この要請は、部分格が付与され、かつ虚辞 *il* と連結された解釈が与えられる名詞句に課せられるものとする。

- (14) Il est arrivé trois filles.
 it is arrived three girls
 ‘There arrived three girls.’ (Belletti 1988, p. 4 (7b))

一方、英語においては、虚辞が単独で格を受け取るような環境では *it* が現れるのに対し、非対格構文等で T 以外に格付与子がなく、かつその格を必要とする他の名詞句が存在する場合には、別の虚辞形式 *there* が現れる。この場合、習得中の子供は *there* が格を要求せず、名詞句が T から格を受け取ると考えればよい。従って非対格動詞の *v* が対格付与能力を持つと考える証拠はない。

このように分析することで、II 節で述べた FI の特徴を捉えられることを確認する。まず、不定詞の上昇は Inf までであり、派生のどの段階においても *faire* と不定詞は構成素を成さない。よって両者が複合動詞を形成しないことが保証される。次に不定詞が他動詞の場合に被使役者が与格で、目的語が対格で標示されることは、対格付与子である不定詞の *v* が被使役者と目的語の 2 つの DP の格を認可しなければならない状況から、III 節 (10) で示されたメカニズムにより導かれる。また、不定詞の項が受動化できないこと (7b, d) は、*faire* (の *v*) が格を付与しないという先述の仮定から説明される。一般に受動化が起こるためには、受動化される動詞の *v* が格付与能力を持たなければならない⁸⁾。

V 結語

本稿では *faire* に代表されるフランス語の FI 使役動詞について、一般的な

(4c) では *il* が生起せず、定名詞句が現れてもよい。

8) OCACCS 仮説の重要な帰結の一つとして、受動化の際の外項の抑制が、Baker, Johnson and Roberts (1989) の提案に基づき、外項が格認可を必要とする接語であり、それが *v* に編入することで受動形態素として具現化するという分析が可能になる (田中 2014)。(7b, d) の場合、被使役者が受動形態素として現れ、すぐ上の v_2 に編入したとしても、 v_2 がこの受動形態素の格を認可できないため、派生が収束しない。

想定とは異なり、*faire* が非対格であり、不定詞の項に対する与格及び対格の付与は不定詞の *v* が責任を持つとする分析を提示した。これにより、*faire* が受動化できないこと、および *faire* と不定詞が複合動詞を形成しないことを導き出せることを示した。不定詞の項（特に外項）に対して *v* が格付与することを可能にするためには、*v* が外項をも c 統御するという OCACCS 仮説を採ることが不可欠であった。

最後に FI を持つかどうかに関する言語間の差異について考察する。英語には（語順の違いは捨象しても）他動詞の FI に相当する構文は存在せず、不定詞が他動詞であっても非使役者は対格で標示される。

- (15) a. *He'll have drink wine to his child.
 b. He'll have his child drink wine.

この違いは、(i) 英語の使役・知覚動詞が、*faire* と違って被使役者に対格を付与することができ、(ii) フランス語と違って英語は不完全な ϕ 素性を持つことができない言語であると仮定することで説明できる。(i) は語彙特性の問題で同一言語内でのバリエーションであるが、特に重要なのは (ii) であり、これによって (15a) が不可能であることが正しく予測される。(ii) は形態統語的素性に関する言語間変異を司るパラメータであり、形態論的には英語には与格が存在しないという言明と等値である（注4）。よって (15a) の *to his child* は与格ではなく前置詞句であるということになるが、被使役者はⅢ節で述べた通り前置詞句では表せない。このように本稿の枠組みにおいては、FI のような不定詞補文の可否を、形態統語素性に関する言語間の差異という一般的に仮定されているパラメータによって捉えることができる。

（筆者は関西学院大学商学部教授）

参考文献

- Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A theory of grammatical function changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Baker, Mark, Kyle Johnson, and Ian Roberts. 1989. Passive arguments raised. *Linguistic Inquiry* 20: 219-251.
- Belletti, Adriana. 1988. The case of unaccusatives. *Linguistic Inquiry* 19: 1-34.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on government and binding: The Pisa lectures*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 1995. Categories and transformations. In *The minimalist program*, 219-394. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Collins, Chris. 1997. *Local economy*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Folli, Raffaella, and Heidi Harley. 2007. Causation, obligation, and argument structure: On the nature of little v. *Linguistic Inquiry* 38: 197-238.
- Hale, Kenneth, and Samuel J. Keyser. 1993. On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, ed. Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, 53-109. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jones, Michael Allan. 1996. *Foundations of French syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kayne, Richard S. 1975. *French syntax: The transformational cycle*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Řezáč, Milan. 2000. Case and agreement in accusative constructions. In *Toronto working papers in linguistics*, ed. Bettina Spreng, volume 19, 75-85.
- Rowlett, Paul. 2007. *The syntax of French*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tanaka, Hiroyuki. 2011. The syntax of dative donor verbs in Japanese. In *Proceedings of the Thirty-Fifth Annual Meeting of The Kansai Linguistic Society*, 48-59.
- 田中裕幸 (2012) 「語彙的受動態における与格認可について」『商学論究』第60巻第1・2号, 567-581頁, 関西学院大学商学研究会.
- 田中裕幸 (2014) 「語彙的受動態から探る与格認可のメカニズム」『日本英文学会第86回大会 Proceedings』244-245頁, 日本英文学会.